

本当の豊かさを求めて  
産経新聞社 論説委員長 千野境子氏

1 はじめに

私が新聞社に入ったのは、世の中のことをもっと知りたい、世界のことをもっと知りたいと希望したからです。新聞記者になって、マニラ、ニューヨーク、シンガポールの特派員を勤めました。シンガポールには1996年から1998年まで駐在しましたが、1996年は、まだアジア経済の成長が続き、「アジアの時代」が叫ばれていました。ところがその翌年97年には通貨危機が起き、人々の暮らしが一変したことはご承知の通りです。

東南アジアの都市を歩いて痛感したことは、貧富格差の大きいことでした。たとえば、マニラではスラムのようなところがそこかしこにありましたが、ガードマンに守られて召使いが何人もいるというようなお金持ちの生活が、一方にはある。本当の豊かさとは何か、本当の幸せは何だろう、とそんなことを考えさせられる特派員生活の日々でした。

2 日本は豊かなのか



今、日本人は自分の国のことをどう思っているのでしょうか。一言でいうと、日本は確かに豊かですが、将来のことを考えると、心配でたまらない、というのが実情ではないでしょうか。新聞やテレビに、今必ず出てくる二つのニュースがあります。それは日本が少子高齢化・人口減少時代に突入したことと、日本は格差社会になったのか、という二点です。

まず少子高齢化の問題。統計によれば、65歳以上のお年寄りは2682万人いますので、日本の人口、1億2776万人の21%が65歳以上の高齢者ということになります。これは世界192カ国で一番高かったと思います。しかもこれからもっと高齢者人口が増えると予想されています。

一方、子供は1740万人で、人口の13.6%を占めていますが、5年に一度実施している国勢調査によれば、連続して減るばかりです。

子供の出生率は、日本はこれまた年々最低記録を更新しており、一番新しい数字では1.25です。

つまり日本の社会は、お年寄りが増えて子供は減っていくばかり。総人口も減少中です。有史以来、日本の人口は、基本的には増え続けてきましたが、初めて減る時代になってしまった。それが、今の日本の社会です。

先ほど、日本は豊かであるのに、日本人は不安でたまらないと言った背景には、そういう事情があります。人口が減れば、労働力人口は当然減ってきます。そうすると、産業はこれ以上伸びなくなるかもしれない。産業が伸びなくなると人々の収入も減ってくる。そうするとお年寄りは増えるのに年金が支えられなくなるかもしれない。こんな風に心配が心配を呼んでしまうわけです。

もう一つの格差社会の話に移ります。これも実は今話してきたことと密接に関係しています。日本では、「一億総中流」という言葉がずっと使われてきました。人口を約一億人として、皆、中流ということでした。東南アジアなど、外国に行って日本との違いを痛感するのは、貧しい人もいるけれど日本でみたことも無いような大金持ちもいるという点です。しかし日本には途上国に見るようなスラムというのはありません。逆に大金持ちも、中にはいますけれど、これまでは皆ほどほどで、中流というのが日本の社会でした。

ところが最近はその中流が崩壊したとか、崩壊しつつあると言われるようになりました。振り返ってみますと、1990年頃に日本の高度経済成長が終り、それ以降の10年を経て、だんだんに格差が広がっていった。



最近の日本の経済白書や労働白書は、みなこの経済格差問題を取り上げています。日本だけではなく、海外の OECD

(経済協力開発機構)のような機関からも、日本の社会は格差が広がっていると指摘されています。

ただ、なぜ経済格差が広がったのかという理由については、まだ答えは出ていません。おそらく答えは一つではなく、いろいろな理由が複雑に絡み合っているのではないかと思います。先ほど触れたように、高齢層が増えて、実働人口が減り、収入が減少したこと、バブル経済が終り、失業者が増え、生活保護世帯が増し、格差が広がったということもあるでしょう。二つ理由を挙げましたが、これらをどう解決するかという問題は、これからの日本の大きな課題の一つだと思います。

### 3 若年層の問題

さらに、もう一つ大きな問題があります。それは若い人々の中にも格差が広がっているということです。いわゆるフリーターとかニートという言葉であらわされる社会問題です。フリーターというのは、定職に就かず、アルバイトのような形で働き、職場を次から次へと変えていく人たちのことで、ニートというのはフリーターより新しい言葉ですが、教育も仕事も、仕事につくための訓練も何も受けていない人たちのことを指します。こういう若者が将来大人になった時、日本の社会はどうなってしまうか、という問題が大きく出てきているのです。

日本と中国とアメリカの高校生に対して行ったアンケートがあります。それによると、将来に対し、日本の若者が一番悲観的です。その一方で、人生で一番大事なことが働くことだという考えをもっている割合も、日本が一番少ないという結果が出ています。この数字の読み方もいろいろだとは思いますが、どうもアメリカや中国の高校生に比べて、日本の若者は将来に対して悲観的傾向を持っているという印象を、私は持っています。以上、日本の社会の現状で、一番問題となっている二つのことを取り上げました。

バブル経済がはじけた 1990 年以降の 10 年は「失われた 10 年」といわれています。このことが喧伝されすぎた結果、日本にやってくる外国人ジャーナリストには、日本の経済が酷いことになっているという先入観をもって取材に来られる方もいますが、皆、首を傾げたり、驚いたりして帰っていきます。日本は経済が大変だというけど誰も飢えていないし、貧しい人もそんなにいないし、ホームレスもアメリカほどではない。ストライキも起こっていないし、賃上げ要求のデモもない。社会はとても静かではないかというんですね。

日本人が心配しすぎなのか、いや、経済とか日本の将来とか、やはり問題を抱えているのか、これは皆さんにもぜひ考えていただきたい点だと思います。

#### 4 日本の戦後復興



ここで、日本の戦後 60 年を振り返り、どのようにして日本はここまでできたかということをお話したいと思います。

2006 年 8 月 15 日で、日本は終戦 61 年を迎えました。61 年前の日本は、原爆が投下された広島・長崎だけでなく、東京はじめ多数の都市が空襲により破壊されていました。人々の暮らしも本当に貧しかった。日本はゼロからの出発をしました。

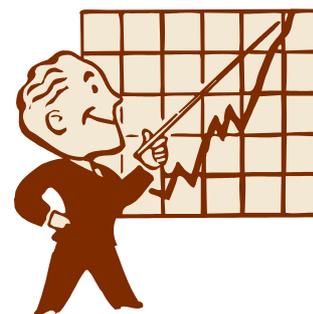
日本は再生のため、経済復興に力を入れ、戦前のように軍事ではなく経済発展中心主義を掲げました。「吉田ドクトリン」という名のもと、日本は再建、復興の道を歩んできました。

しかし今日、日本の自殺者は 3 万人を超えています。戦争が終わった時、本当に着るものも食べるものも満足になかった時代、自殺者はいたかもしれませんが、これほどではなかった。

またベビーブームも起きました。今、出生率は 1.25 と言いましたが当時もものはものすごくたくさんの子供が生まれて、学校もぎゅうぎゅう詰めで、授業も午前と午後に分けて行わなければならないくらい子供達がたくさんいました。

そうした中で日本人は戦争はもう結構、平和がいいとともかく一生懸命働き、戦争からちょうど 10 年後には、「もう戦後ではない」というキャッチフレーズが言われるほど経済は立ち直りました。

そして 1960 年代、70 年代と経済はずっと右肩上がり成長してきました。79 年にハーバード大学のエズラ・ヴォーゲル教授が「Japan as number one」という本を出し、そこで日本経済の成長の秘密を取り上げて、文字通り日本がアメリカを追い越すのではないかといわれるくらいの経済大国になりました。



私は、ニューヨークの特派員を 3 年間やりました。ちょうど今のブッシュ大統領の父親の時代で、湾岸戦争とかカンボジアの PKO など取材しましたが、アメリカ社会について書くときは、例えば、ニューヨークの有名な百貨店が会社更生法を申請するとか、米国経済が問題を抱えていることなどアメリカの駄目な話ばかりを書いた記憶があります。ニューヨークの地下鉄は危険だとか、街が汚いとか、オフィスビルが空き家ばかりといった話題の一方、日本の不動産会社が、例えばロックフェラービルとか西海岸の有名なゴルフコースを買収した話とか、日米の取材は対照的でした。

しかし、「奢れる者久しからず」という言葉の通り、それは長くは続きませんでした。

日本がいい気になっている間に、アメリカは復活し、当時危ないと言われた地下鉄も、汚名を返上しました。

日本も「失われた 10 年（厳密には 10 年以上ですけれども）」の停滞する経済の時代を経て、ようやくこの数年、日本は復活をしたという風に言われるようになりました。しかしその結果現れた日本というのは、前の日本とは違った社会になっているのではないかと私は思います。それが冒頭申し上げた今、日本が直面している現状にも繋がるわけです。

## 5 日本はどこへ行くのか



それではもう一度現在に戻って、これからの日本はどのような日本になっていくのか、あるいはどのような日本を目指しているのか、今日本人は何を求めているのかなどについて、考えてみたいと思います。

ここでもまた私は、二つの事例を引きたいと思います。一つは「もったいない」と言った知事が当選したこと、二つめは日本を取り巻く様々な災害・自然・環境の問題です。

この「もったいない」という日本語を外国に広めてくれたのは 2005 年度のノーベル平和賞を受賞したケニアの環境副大臣、女性のワンガリ・マータイさんです。

日本では利便性最優先の風潮の中で、もったいないという考え方が忘れられていたという風に思っています。滋賀県で当選した女性の知事は大学の先生ですが、「もったいない」というキャッチフレーズで現職の知事を破りました。滋賀県に新幹線の新駅を作るとというのが現職の知事の主張でしたけれども、そういうものはいらないと主張し、行政経験のない大学の先生が当選したわけです。私は、これは市民が、本当の豊かさとは何か、暮らしの豊かさとは何か、どういう風に日本人は生きていくべきかという問いに対する一つの答えというか、その表れではないかという風に感じています。

それからもう一つ、災害の話をして。「自助 7 割、共助 2 割、公助 1」という言葉があります。これについて説明したいと思います。

日本はとても災害の多い島国です。阪神大震災の時は 5000 人くらいの方が亡くなりました。このとき、まず自分が自らを助ける、それがもっとも大事だということが改めて認識されました。人々は何が災害が起きた時、政府とかお役所が飛んできて助けてくれると、そういう風に考えていましたが、実はそうではなくて、災害が起きたときにはまず自分がしっかりと対処する、それからその次はみんなで助け合う、そして最後は行政が助ける、そういうことでないと本当に人々は救われない、それが阪神大震災で分かった現実でした。

阪神大震災の時に外国のメディアが驚いて報じたことがあります。高速道路はぐにゃぐにゃに潰れ、ビルは倒壊し、火事が起きて人々も亡くなった。大変悲惨な状態でしたが、略奪とか、暴動などはほとんど起きなかった。人々は、応急の食べ物や水などを、先を争うことなく、行列をしてもらいました。まだまだ日本の社会はそういう助け合いの心があるというようなことが驚きをもって報道されました。

台風も日本にはよく来ます。私の子供の頃は、大きな台風だと 100 人とか多いときは 1000 人単位で人々が亡くなりました。今でも南アジアでは、洪水や台風で、多くの犠牲者が出ています。日本もかつてはそうでしたけれども、台風の予報がしっかりしてきて、犠牲者は大幅に減りました。しかし、豪雨や、豪雪で高齢者が犠牲になるような新たな事態が生まれています。

日本はいろいろな国々に、政府開発援助、すなわち ODA の支援を行っています。特にアジアには力を入れています。しかし、経済的な援助だけでなく、環境とか災害の問題でいろいろな経験を持っているので、防災面での技術的援助や知識の提供などが、今後は非常に大事になって行くのではないかと感じています。

## 6 日本とアジア

日本がアジアの中で共に生き、共に考え、そして豊かなアジアを作っていくために、どうしたらよいのでしょうか。今申し上げましたように、自然災害への対策など、日本が経験したこと伝えていくこともその一つですが、まだまだ他にもあるのではないかと思います。一言で言うと、日本が経験したことの中には、良い経験も悪い経験もあります。経済成長は確かに大事なことです、経済成長だけを求め、行き過ぎた点があったのも事実です。アジアが、そうした日本の失敗から学ぶこと、失敗を糧とすることも大事なことはないかと思っています。



国の豊かさ、国力を測るバロメータには、いろいろなものがあります。経済的指標の国民総生産がもっとも一般的ですが、果たして本当にそれだけで豊かさは測れるのでしょうか。ブータンは、中国とインドとネパールに挟まれた小国ですが、その国王が「国民総幸福量」というのを提唱しています。残念ながら私ブータンに行ったことはありませんが、この国王が目指している、「国民総幸福量」を大きくしなければいけないという国作りに、とても関心を持っています。大事なことは、その国が、その国らしく自らの物差しを持って豊かさ、人々の暮らしの向上を求めるという点です。

どの国にも、それぞれの歴史や、伝統があり、文化がある。それに基づいて国を作っていくかねばなりませんし、その中で求める豊かさということがまず大事です。ほかの国々は、それを踏まえて協力していくことが望ましいし、それがこれからのあり方ではないかと考えています。

グローバル化の今日、他の国からの影響というものが止めようとしても止められないくらい入ってきています。そしてそういうものを取り入れることも一方では大事だと言わなければならないと思います。日本は江戸時代 400 年鎖国をしていましたが、一旦開国した途端、どんどん欧米のものが入ってきました。日本は、それらを取り入れるだけではなくて、吸収して国づくりをしました。日本固有の歴史や文化を持つと同時に、他に対して柔軟であったという姿勢が大事であった、ということは申し添えなければいけないと思います。

## 7 文化力の時代

国を測るバロメータの中に「文化力」というものもあります。たとえば、村上春樹さんの本は、中国でも韓国でもロシアでもアメリカでもヨーロッパでも大変に読まれています。日本は経済大国で、世界中に経済的影響を与えてきましたが、最近、日本は経済力よりも文化力で世界に影響を与えているという指摘も聞かれる様になりました。

村上春樹さんはその一例ですが、アニメーションやファッション、映画や建築など、日本の文化の力というものが非常に高く評価をされている、というのが今世界で起きている新しい傾向の一つです。

実は、そのことを気づかせてくれたのは、海外のジャーナリストであり、海外の雑誌でした。「Foreign policy」というアメリカの雑誌で、そこに「Japan cool」というレポートが出ました。「cool」というのはカッコいい、という意味です。記事は、日本人は、経済力で世界に影響力を示したと思っているかもしれないが、実は人々に本当に影響を与えているのは経済より文化だ、と論評しました。そして筆者は、これからの生活に重要なのは、国民総生産よりもGNC、Gross national coolだということです。

私は、冒頭、今の日本人は豊かでありながら不安に陥っている、と申し上げました。しかし、日本にはアジアに、そして世界に、まだまだ発信できるものが数多くあるのだと言うことをここで改めて申し上げたいと思います。そして日本の中に閉じこもらず自分たちの力にもう少し気づいて、国際社会と共に生きていくことが大事だという点を強調して、お話を締め括りたいと思います。